

新宿区夏目漱石コンクール わたしの漱石、わたしの一行

中学生の部 最優秀賞

百年の意味

筑波大学附属中学校 3年 堤 千佳

作品名『夢十夜』
選んだ一行 百年待っていてください

ここ数年、分厚い本に辟易していた私は、テンポのいい短編集へと自然に手が伸びた。何気なく選んだが、怪談好きの私のストライクゾーンに、パシッと入り込んで来た『夢十夜』。こんな夢を見た、から始まる十の夜は、言葉が役割とリズムを持ち、幻想的で、夏の怪談のようにぞわっと怖く、雲に乗ったかのようにふわふわした感じから出来ている。

「百年待っていてください」

第一夜の、美しい女性が話すこの一文が、頭からも心からも離れず、切なくなった。漱石に対し気難しい優等生作家の印象しかなかった反動からか、意外な物語の運びに吸い込まれ、どんどん世界が膨らんでいった。

何にこんなにも心を引きつけられたのか。夢だから何でもありなのに、ほとんどの背景が闇の黒い色。怖い。そこに星のきらきらした色、女の人の赤い唇、真珠貝の銀色に輝く色、百合の花の純白、文を読んでいるのに、絵を見ているような不思議な感じだ。

その上、引き込まれたのは、私自身も表現するのが難しい不思議な夢をよく見るからだ。夢には、自分の願望、思い出、後悔そして未来への希望までも現れる。自分の心の奥に潜んでいるかわいいた使も、憎たらしい悪魔も登場し、辻褄の合わないストーリーに心を奪われ、目が覚めてしばらくぼーっとしながら夢を反芻する。一日のスタートが良いか悪いかの別れと言っても言い過ぎではない。

漱石の書いている夢は実際に見たものではないかもしれないが、心の闇を吐き出している所は同じように思う。ただ、私には死の恐怖などがわからない。生きる喜びもいまひとつわからない。歳を取って、大きな病気をした時にこそ、この本をまた読んでみたい。

今年に漱石の代表作『こころ』の連載が新聞紙上で始まって百年にあたるそうだ。人に忘れられずに百年も持ちこたえる事の大変さ、人の寿命としても、手が届きそうで届かない時間の長さ、そう、百年というのは憧れでもあり、努力と継続の賜物であると思う。

百年後の現代にも通じる漱石の言葉、百年待っていてくださいという文章は、恋だ、運命の人だ、生まれ変わっても一緒に、という少女漫画的な面だけでなく、漱石の心から發する自分の作品への、あふれる愛情をも感じる。

私も真似して書いてみると面白そうだ。
「こんな夢をみた」、こういう日記も、自分で気づかない自分の心を写す鏡となるかも。
文章とは、人を動かすエネルギーとなる。

文章をかたち作る単位となる言葉とは、そのエネルギーの源だ。使い方一つで、優しく暖かい毛布にもなり、鋭い刃物にもなる。
そんなことを常に、意識したい。

そして、こんなに短い文でも、ずしっと重く、長い時代を超えても、心にこっそり落とし物をして行く、不思議な魔力を味わうため、もっともっとたくさんの本と出会ってみたい。

高校生の部 最優秀賞

美しい喜び、そんな心持への憧憬

光塩女子学院高等科 2年 小島 麻

作品名『硝子戸の中』
選んだ一行「どうして私の悪口を自分で肯定するようなこの挨拶が、それ程自然に、それ程雑

作なく、それ程拘泥わずに、するすると私の咽喉を滑り越したのだろうか。私はその時透明な好い心持がした。」

「透明な好い心持」。純白の美しさに染め抜かれてしまったような、私の大好きな一節である。病身の漱石、厭世家の漱石の印象は、この瞬間に「するすると」私の心の中から飛びだしていった。そして新たな、爽やかな風が心の中を吹き抜けた。

漱石の高等学校時代の親友・太田達人は常に鷹揚とした人格者であったそうだ。漱石は彼のことを、「敬愛に価する長者として認めていた」。何しろ秋のある日、二人が話しながら散歩をしていると、樹の枝から小さな葉がはらりと落ちたのを見て「あっ悟った」と叫んでしまう人物なのだ。漱石はすっかり驚いてしまっ、暫く言葉が出なかったという。

そんな友人と漱石が久しぶりに会う場面である。漱石が座敷へ行って先に席に着いていると、廊下伝いに部屋の前まで達人が歩いてきた。それで座蒲団の上に「きちんと坐っている私(漱石)」を見るなり、開口一番、こう言うのである。「いやに澄ましているな」。

この達人の物言いからも、二人が互いのことをよく知り合っているのがうかがえる。親友として長く会っていないければ、私も何となく緊張してしましそうな気がする。特に相手は達人——名は体を表すというように、人生を達観している——のような人物だとしたら、自分の考えていることをすぐに見抜かれるのではないかと思つて。だが達人は人の弱みにつけ込むようなことはしない。誠実な漱石を知っているのだ。だからこそ、そう畏まるんじゃない、疲れてしまふよ、と労いの思いを包み込んで「からかう」という形を取つたのだ。

真面目に言葉を受け取つた漱石も、彼の意を解しただろう。同時に、友人に先手を取られてしまったと感じた。互いに自身を糊塗したりしない、暗黙の信頼感が彼の「悪口」によって引き出されてきたのだから。漱石も照れ臭さを、彼によってくり貫かれた自分自身の内に押し隠すようにして、負けじと答えた。

「うん」。友人の「悪口」に被せて。何だかスリリングな二人のやり取りである。漱石は瞬間、他人に対してのみならず自身の心情に対して非常に素直である自分の一面を強く感じる。大人同士であつて、夾雑物も構えも全く無い、純白な空気を感ずる。そして、新鮮な喜びを胸に抱くのだ。「どうして私の悪口を自分で肯定するようなこの挨拶が、それ程自然に、それ程雑作なく、それほど拘泥わずに、するすると私の咽喉を滑り越したのだろうか。私はその時透明な好い心持がした。」漱石の豊かで繊細な感受性が伝わってくるのも、私がこのくだりが素敵だと思ふ理由である。

人間関係において本当の「悪口」しか言えない、聞かない私には彼らのような友人関係は一種の憧れでもある。私も、漱石や達人のような心をもちたい。たまにはびりびりするのをやめて、友人の言葉に「うん」とだけ答えてみようか。その時には私の心にもきつと自分で透明な風を吹かせられると思うのだ。

新宿区夏目漱石コンクール

猫になって描いてみよう～わがはいはネコである～

小学生低学年の部 最優秀賞 「カラー マテ！」
松山市立栗井小学校 2年 持谷 麻那



説明：私はお母さんにないしょでぬすみ食いをした時に「カラー」とおこられました。
ネコだったらビックリして口から魚を落とすかも…

小学生高学年の部 最優秀賞「手をふられてもなあ…」
新宿区立四谷小学校 5年 相馬 伸明



説明：ネコは人間より小さくてもすぐ高い所にのぼって、いつもゆうゆうとすごしている。
下から見上げててをふってもめんどくさそうにみている。気がむいたらしっぽが
たまにうごいている。